



就学前の心身に障害のある児童に発達支援などを行っている、ひかり児童園。ここで清掃の仕事をしている会田さん(写真中央)も知的障害があります。

ともいっしょに働く

障害者福祉課 0224-57855 FAX 02255-30033

精神・知的・身体、社会には、さまざまな障害のある人がいます。重度の人はもちろん、軽度の障害でも多くの悩みや葛藤を抱えています。自分の持っている障害を認識し、できることとできないことを自覚する。その上で社会とかわつていこうと努力している皆さんの姿を追いかけました。

*この記事では、写真キャプションを除き、すべての文字にふりがなを付けています。

ともいっしょに働く 精神障害者の一日

●働くことの充実感
主に就労支援を行っている通所施設の朝9時。十人ほどの通所者と職員でミーティングが始まります。体

調と互いの連絡事項、職員からの連絡事項を確認。その後、各自その日の作業へと移ります。

50歳代のAさんは、二十年以上続けてきた自動車関連の会社でリストラされ、同時にうつ病を発症しました。昨年1月から就労移行のための通所施設に通っています。この日の午前中は地域清掃を行いました。地域清掃とは、施設周辺を何人かのグループで清掃して回る活動。あらかじめ設定したいくつかのコースの中から、その日の作業時間や人数に合わせて選択し、路上に落ちて

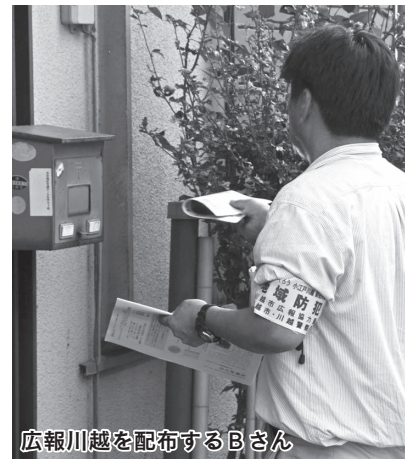


1時間半ほどかけて2コースの清掃を行いました



仲間とともに配布物の搬入作業

いるごみなどを拾います。「仲間ができたことと、規則正しい生活ができるようになったことかな」と、施設に通うようになってから変わったことを、Aさんは話してくれました。午後の作業はミニコミ誌の配布作業を始めたころは道を覚えるので一杯だったそうです。「腰が悪いので近くを歩いて配布することしかできません。それでも配り終わったらあとは充実感があります」。働くことで社会とつながっている、という実感が持てると話します。「今はこの作業しかしていませんが、これからはハローワークに行つて三時間ぐらいのパートの仕事を探したいですね」。



広報川越を配布するBさん

●精神障害者の就職事情

障害者施設で広報川越の配布を行っているBさん。製造業の会社で十五年以上勤務していました。発病したときのことを「変な声が聞こえるんです。これが始まると何もできなくなってしまう」と話します。数年間、ひきこもりとリハビリの生活が続きました。1月からは通所施設で作業をしています。社会復帰の準備を進めつつ、体力の向上や、自分が自由と感じられる時間と空間を確保できるように努めています。

同じ施設で運営している喫茶店で清掃・配膳などの作業をしているCさん。十年以上働いていなかったため、働く前の準備として、一年前から施設に通っています。「ホテルでアルバイトをしていたときに幻聴が聞こえるようになりました」。その後、数年は自宅でひきこもり状

●働くために

精神障害のある人は、今なお残る偏見のために再就職が難しいのが現状です。また、頑張りすぎると病状が悪化することもあります。「自分の病気とうまくつきあつていくために、できることと危険なことを理解しないといけない」とAさん。一人ひとり症状や程度が異なるため、その人に合わせた対処が必要。そして、周囲の人と良質な関係が作れるかが重要になってきます。人間関係を再構築し、就労支援をする通所施設。それは、精神障害者の社会復帰に欠かせないものです。



関店前の清掃作業

●精神障害について

精神障害者とは、精神疾患のため長期にわたり日常生活や社会生活に困難がある人です。症状は人によって異なるため、誤解されたり正しく理解されなかったりすることがあります。「なまけている」「何をするか分からない」などの偏見が、自立と社会参加の障壁となっています。精神障害を抱えながらも、自立と社会参加のため、身近なところで努力している人たちがいます。精神疾患には、統合失調症、気分障害、非定型精神病、てんかん、精神作用物質による精神障害、器質性精神病、その他の精神疾患などがあります。近年、精神疾患のある人が増加し、国では、4大疾病である、がん、脳卒中、急性心筋梗塞、糖尿病に新たに精神疾患を加え「5大疾病」とする予定です。

「みんなできると落ち着きます」と会田さん(左)
田中さん(右)も楽しそうです



「料理をするのは楽しいですね」と会田さん



子ども用の
おもちゃを
作るための
下絵はり作業は、
田中さんのお気に入り



生日には販売を行うことも



かながけをする田中さんの真剣な表情



「優先順位や時間を考えて掃除しています」

ともむらむら

●できることは自分でする

田中正幸さん(43歳)と会田勝人さん(26歳)は、施設に通いつつ、同じグループホームで共同生活をしています。

田中さんは脳性まひによる身体の障害と、知的障害の両方があります。他人が話すことは理解できるものの、声での会話はできません。会話中も、田中さんの感じるもどかしさが伝わってきます。でも、おしゃべりはとっても大好き。「一緒に暮らしているのと、ちよっとしたしぐさや表情で何を言いたいのか大体分かるんですよ」と会田さん。

知的障害者の一日

*□は、グループホームで撮影したものです。

できることはすべて自分で行い、施設の作業で稼いだお金も自己管理。スポーツ番組と歌番組を見るのが好きなだけでなく、自分で歩いていろいろな場所に行くことも大好きです。「歩くのがものすごく早くて、とてもついていけないですよ」と会田さん。週末には電車に乗って都内に出かける、行動派の田中さん。「こんどスカイツリーなどを巡る、バスツアーに行く」。右手薬指でトーンキングエイドという機械を操り、話してくれました。少しでも動きがスムーズになるよう、現在も腕の体操を欠かさないそうです。

知的障害について

知的障害とは、先天的な原因や生後比較的早い時期に知的機能の障害が現れ、日常生活や社会生活に困難がある人です。知的機能だけでなく、言動や感情、意志などに障害がある人もいます。また、身体の機能に障害を伴うこともあります。知的障害は、染色体や脳などの疾患が原因となることもあります。得意なことと苦手なことがあり、それが原因となって社会的な偏見や差別を受けることもあります。コミュニケーションが苦手な人もいれば、無邪気で陽気な性格の人などさまざまです。また、こだわりが強く頑固なところもありますが、自分で理解した作業や興味を持ったことに対しては、抜群の集中力を発揮する人もいます。

●自分の居場所

会田さんに知的障害があると判明したのは小学2年生の時。授業についていけず、いじめにあつて不登校になってしまいました。その後、養護学校(現在の特別支援学校)に行つてからは安定し、学校生活で自信をつけました。早く自立したいとの思いから、卒業後すぐに製造業の会社に就職します。ところがそこで事件が発生。「部品を削りすぎ、納品前日にすべてやり直さなければならなくなりました」。分からないことを聞いたり、気持ちをうまく伝えたりすることが苦手な会田さんは、ひきこもり状態となり、会社を辞め

ることに。その後別の会社に勤めても、出社できない日が多く、約一年間、ひきこもりの生活を送っていました。「自分がいけないことをしたのは分かつているんです。心の中では自分と格闘しているんです」。転職となったのは二年前、ひかり児童園で清掃の仕事をすることになったとき。不安でいっぱいだったとき、会田さんは逃げ出してしまいました。今まで一週間は帰つてこなかった会田さん。「こんなことを繰り返すのがいやになって、一日で帰ってきました」。怒られると思ひながら帰ったとき、施設長は「よく戻ってきた」と迎えてくれたそう

です。翌日職場に謝りに行き、無事就職することができました。「グループホームでの生活と施設の作業を経験したことで、ようやく自分の居場所を見つけることができました。今ではひかり児童園の子どもを見て、自分も変わらなきゃと思つています」。現在は毎日、ひかり児童園で清掃の仕事をしています。朝夕に、施設に顔を出すのも欠かしません。グループホームではヘルパーさんと一緒に掃除・炊事・洗濯といった家事もこなす会田さん。「つらいことや逃げ出したいと思うことはありません。でも今は周りに支えてくれる人がいるから大丈夫です」。



洗濯した全員の衣類を手際よく干します



今日の夕飯は八宝菜丼とギョウザ みんなで食べるとおいしさもアップ



力が入りすぎでしまうため疲れやすい田中さん 一生懸命歯を磨いています



小遣い帳をチェックしてもらおう会田さん 「ちゃんと管理できてるね」



自転車でグループホームへ帰ります



ひかり児童園で清掃を終えると施設で作業を手伝うのが日課です

ひとりで過ごす

身体障害者の一日

18歳のとき、バイクの事故が原因で脊椎を損傷し、首から上と右腕以外動かすことができなくなった斉藤邦明さん(46歳)。入所施設に入ってから八年目です。その前は自宅で生活していましたが、「家では電動車いすもなく、自分で動けないので、ほとんど寝たきりでした。たまに友人が連れ出してくれましたけど」と当時を振り返る斉藤さん。入所して初めて電動車いすを使ったとき「自分の



部屋でくつろぐ斉藤さん(左)と阿部さん(右)「パソコンでゲームを楽しむことが多いですね」



回にくわえた棒と専用のマウスでパソコンを操作かなりスムーズに動かしています



職員研修の様子
斉藤さんも緊張気味です

意思で動きたいところに動ける」喜びを再認識したそうです。今では自分の足となった電動車いす。これで行くことも可能になりました。施設に入ってから一番の変化は、同じ境遇の友人が何人もできたこと。友人の一人である阿部努さん(41歳)は、29歳のとき脳出血で右半身のみひと、言語障害が残りました。施設に来た阿部さんと偶然会った斉藤さんは「初めて会ったときからなぜか気が合って」。その後、阿部さんはデザイナーズやショートステイのたびに、斉藤さんの部屋まで遊びに来るようになりました。

「不満や不安がないわけじゃないけど、できることをしながら、毎日を楽しく過ごしたい」と話す斉藤さんと話すと、阿部さんは「人前で話すのは苦手なんですけど、少しでも役に立つのなら」。



手首を固定し筆をバンドで巻きつけ腕の動きで文字を書きます

「不満や不安がないわけじゃないけど、できることをしながら、毎日を楽しく過ごしたい」と話す斉藤さんと話すと、阿部さんは「人前で話すのは苦手なんですけど、少しでも役に立つのなら」。

身体障害について

身体障害者とは、目や耳、手足、内臓の機能などに一定以上の障害があり、日常生活や社会生活に困難がある人です。障害の種類は、視覚障害、聴覚・平衡機能障害、音声・言語・そしゃく機能障害、肢体不自由、内部機能障害があります。聴覚障害や内部機能障害などは、外見から分からないことが多いため、誤解を受けることもあります。

障害の種類により、求められる配慮は異なります。例えば障害者対応トイレ。以前は、車いすの人に配慮した設計でしたが、最近はオストメイト(腹部などに排泄のための開口部を造設した人のこと。排泄物をためておく袋の交換が必要)に対応した多目的トイレが増えてきました。



三人で近くの店に買い物に行くこともあるそうです

手話=目で見る言葉



生まれたときから耳が聞こえない小林充さん(34歳)。「ろう者(手話を話す聴覚障害者)にとって、日本語は別の言語、いわば外国語なんです」と話す小林さん。

手話には日本語とは異なる文法があるため、書かれた文章を理解することにも、困難が伴います。聴覚障害を少しでも理解して欲しい。その思いから、製造業の会社で働きつつ、手話通訳者養成講習会の講師も務めています。

小林さんの講義を受けている人は「学ぶほどに聞こえない人の大変さや通訳の難しさを実感しています。手話を知らなかったら、こんな気持ちにならなかったかも」。



講義は手話で行われるため会場内はほとんど音がしません

ろう学校を卒業後、製造業の会社に就職した小林さん。ところが、会社には手話を話す人がいません

でした。筆談と声で会話しようとしたものの、なかなかうまくいきません。「手話なら100%理解できても、筆談だと難しい。思っていることや言いたいことを書いて伝えると、文法や『てにをは』が正しくないことも。書いてあることを理解するだけでも時間がかかるんですよ」。

小林さんは「聞こえない人はその分目で見ています。見つけることに関しては鋭いんですよ」と笑顔を見せます。今となっては、日常生活で聞こえないことによる不便さを感じることも、あまりないそうです。「自分は聞こえないことが普通なのに、障害者と呼ばれることに違和感を感じる」という小林さん。「お互いに知ろうとすることが大切。音のない世界に生きる人と音のある世界に生きる人の感覚の違いを、多くの人に分かって欲しいですね」。

市が実施している障害者支援について

市では、障害者が自立した日常生活や社会生活を送ることができるよう、次の支援を行っています。相談は無料です。事前に予約してください。

障害者相談支援

日常生活の困りごとや福祉サービスの利用援助などを行います。

●川越市障害者相談支援センター 連雀町31-2 ☎227-4113 ☎228-1990
相談日時…月～金曜日、午前9時～午後5時30分 ▶土曜日、午前9時～11時30分(祝・休日、年末年始を除く)

障害者就労支援

就労に関する相談・助言や、就職に向けた準備支援などを行います。

●川越市障害者就労支援センター 石原町2丁目33-1 ☎227-5335 ☎227-5345
相談日時…月～金曜日、午前8時30分～午後5時 ▶土曜日、午前8時30分～午後0時30分(祝・休日、年末年始を除く)

ともに生きるために

ソーシャルインクルージョン(支えあい、包み込む社会)の実現を目指して

差別や偏見は、社会全体の意識が変わらなければ解決できない問題。多様な障害や障害のある人に対する理解が不可欠です。現在市では、「障害者週間のつどい」を開催したり、「ふれあい福祉まつり」などの催しや、オアシスを利用した交流事業を支援したりしています。また、市内の障害者施設では、地域との交流事業も活発に行われています。

身体障害者31・3%、知的障害者65・9%、精神障害者60・4%。この数字は、昨年度が実施した調査において、差別や偏見があると感じている障害のある人の割合です。全体で、差別・偏見を経験した場面は「雇用・就職」が最も多くなっています。依然として、障害のある人への差別や偏見が少なからずあることが分かります。

「働くことは生きること」。そういった障害のある人がいました。それは、人に喜ばれ自分が役に立っていることを実感できるから。「働いてることを実感できないから」「働いて社会と接しないと『ありがとう』と言われることはまずありません。自分が役に立つと実感することもなければ、自分が成長していくことを体験することもできない」。働くことが、自分の存在意義になっています。

誰でも、どこかで、何かしらの「障害」があります。本来、障害とは、その人の状態と社会環境による障壁との相互関係から生じるもの。だから、互いに支えあう重要性を地域全体が理解する必要があります。障害のある人を、自然に支えあい、包み込むことができるハートのバリアフリー。それは、ともに生きていくために欠かせないものです。